

海軍航空隊と私

鶴田 浩二

●良い思い出ではない

わたしには海軍に関して、爪のアカほどもいい思い出はないですよ。そうでしょう。我々は好んで戦争に参加したんじゃないんです。非常時措置とやらで、特攻要員として動員されたんです。多くの国民と同様に被害者なんですよ。

少なくとも、自分で志願した職業軍人とは動機が違うんです。昭和15年¹5月15日、午前9時。80円の軍刀をさげて大井航空隊に入隊したのは私が関西大学1年生の時でした。十中八九勝てるとは思わなかった。でも、自分たちが先に行くことで、2か月でも3か月でも銃後にいる骨肉の寿命を延ばすことができたなら……という気持ちで参加したんです。

いずれにせよ、戦争に突入してしまったんだから、自分なりにその責任をとるのが、キンタマさげた男のとるべき態度なんだ。それなのに、日本のかつての指導者たちは、アフターケアを忘れすぎてますよ。

●辛く、苦しかった訓練

私は此花商業（大阪）当時から応援団員でしたから健康には自信があったんですが、軍隊では8貫目（30kg）という完全装備で、4里（約16km）、5里（約20km）とカケ足させられたのはキツかったですよ。1人でも落伍すると全員の責任にさせられてしまいますから、弱いヤツの装備を持ってやったりしなくちゃいけないんです。

腹が減りましてね。教練の途中で桃の畑の中を通るんです。隊列を崩すと怒鳴られるから、手の伸びる範囲で青かろうが虫くっついていようが、桃をむしってポケットにつめこみました。道道、それをむしゃぶり食ったんですが、翌日はピーピー。下痢しても食わずにはいられなかったくらい腹が減ったもんですよ。

●いまこそ戦争の意味を

大井航空隊では、岩見少佐という人が隊長でした。大柄な人でね、マフラーの巻き方がカッコよかったんだ、それをマネしただけで、上官から「貴様らナマイキだッ」と往復ビンタですわ。まるで人間扱いじゃない。牛か豚なみですよ。

終戦直前に私は特殊潜航艇乗組要員になっていましたから、そりゃ、いずれ死ぬ身でした。もう少し、ホント、あと数日も戦争が延びていけば八丈島から出撃していたでしょう。現に、仲間の4分の1を先に送っちゃった。

終戦を迎えたのは八丈島へ出発するために横須賀で待機していたときでした。それから、なににでも腹が立ってねえ。だれかれかまわずにケンカをして歩いたものです。人を見ると、ノホホンとしてやがってって気になっちゃったんです。30までは荒れてましたね。

¹ 19年の間違い

40 過ぎてからですよ。これじゃいかんと思って遺骨収集など地味な活動をはじめたのは……。

この 8 月 15 日に出す「あゝ戦友」(ビクター発売、柴田よしかず詩、豊田あつし曲) というレコードも甲飛 13 期生の作った歌を歌うんです。その利益金を何らかのお役に立てていただこうと思ひましてね。あの戦争とは、いったい何だったのか、ということを次の世代に伝えなくてはいけない。それが、生き残った私たちの義務だと思います。

(亡き友の、夢を、ねらい²を、まごころを、子々孫々に語りつけ

——これは彼の新しく吹き込んだ歌「あゝ戦友」の一節である。

鶴田浩二、いや本名で言うべきだろう。小野栄一さんは、さる 5 月 21 日、「遺骨収集」に協力したとして、田中厚生大臣から異例の感謝状を受けた)

² 願いの間違い